研究成果の紹介

近年の水稲多収品種の栽培特性

水稲多収品種「どんとこい」「とよめき」「ちほみのり」の３品種の生育特性と収量確保のための栽培方法を検討した。その結果、早期栽培の「とよめき」と肥効調節型肥料の100日タイプの組合せが最も多収となることが分かった。

内　容

近年作付けが増加している水稲多収品種について、本県における栽培特性を明らかにするため、「どんとこい」（対照）と、県下で栽培が進められており、さらに多収が見込める「とよめき」「ちほみのり」について、２作期と２種類の肥効調節型肥料を組み合わせ、それぞれ生育特性と収量性について検討した。

早期は2020年５月20日に、普通期は６月11日に移植した。また、施肥量は窒素成分量10kg/10aとし、施肥方法は各作期とも全量基肥とし、２種類の肥効調節型肥料「80日タイプ」（25-10-10）と「100日タイプ」（25-10-10）を施用した。

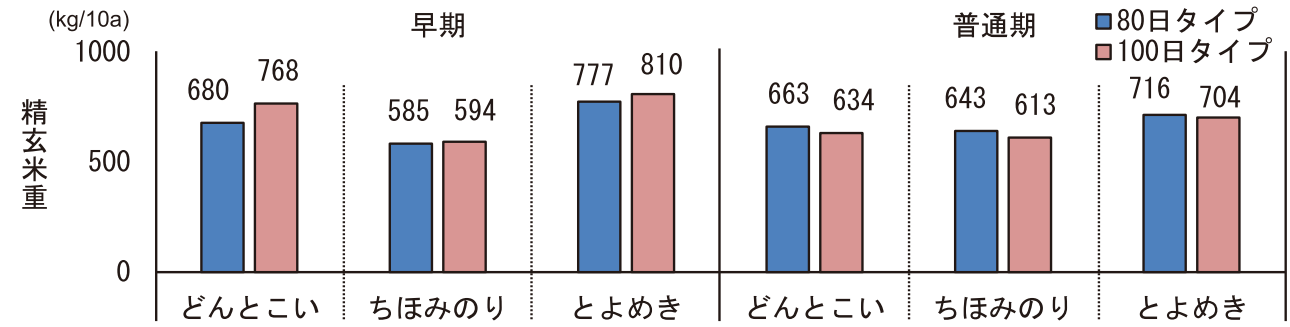
その結果、精玄米重は早期・普通期とも「とよめき」「どんとこい」「ちほみのり」の順に多かった。作期が異なる各区の精玄米重を比較すると、「どんとこい」「とよめき」の両区において、早期の方が多収となった。特に、「とよめき」の早期-100日タイプ区では、精玄米重が810kg/10aと著しく多収となった（図）。一方、「ちほみのり」は普通期で多収となった。同時期の２肥料区間で精玄米重を比較すると、３品種ともに早期では100日タイプで多収となる傾向がみられ、普通期では80日タイプで多収となる傾向がみられた。ただし、早期-80日タイプ区の「どんとこい」「とよめき」では中程度以上の倒伏がみられた。

以上のことから、収量を求めるなら、早期の「とよめき」-100日タイプ区が最適であるが、やや倒伏しやすい欠点がある。一方、「ちほみのり」の収量は他の２品種に比べてやや少ないが、収穫までの日数が短く、倒伏に強いという特徴がみられた。

今後の方針

他の多収品種についても特性把握を行い、現場普及に対応できる栽培技術の開発を進めていく。

松川　慎平（農産園芸部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－2410）



	早期						普通期					
	どんとこい		ちほみのり		とよめき		どんとこい		ちほみのり		とよめき	
出穂期	7/31	7/31	7/22	7/22	8/2	8/2	8/12	8/12	8/9	8/9	8/16	8/17
成熟期	9/8	9/12	8/25	8/25	9/13	9/14	9/19	9/18	9/14	9/16	9/28	9/28
倒伏程度*	5.0	3.0	0.0	0.0	3.7	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0

＊ 倒伏程度は０(無)～5(甚)で評価した

図 作期と肥料の種類が多収品種の精玄米重に及ぼす影響(2020 年)